

学舎長日記

故郷で福祉担当神父の仕事をしていた、フランス人宣教師マルコ・マリー・ド・ロ神父は、1868(明治元)年、禁教令の解けない日本(長崎)に来日した。キリシタン信仰があるというだけで投獄されていた時代である。「人間の基本的人権である信教の自由を認めない国は近代国家とはいえない。」と諸外国から抗議を受け、禁制の高札が撤去されたのが1873(明治6)年のことである。神父は、1879(明治12)年、貧しい半農半漁の集落(出津)に移り住み、授産・福祉施設といえる救助院を設立。「教育が人をつくる」との教えを実践し、製粉、機織り等の技術を伝えながら、算術などの学業も授けた。先駆的な営みがあまり世に知られていないのは、旧出津救助院を訪ねた折にシスターよりお聞きした話から、「自らの行いを殊更に世に知らしめないことを美德」としていたことによるものだと思えた。

1893(明治26)年、神父が設計し信徒と共に石造りの大野教会堂が建てられた。前面に広がる五島灘をどのような思いで眺めたであろうか。社会福祉というものはただ単に衣食住を与えれば良いというものではない。自らの力で立ち上がり、道を開拓し支え続ける実践(生き方)の大切さを教えてくれている。

(小松) <一羔ニュース第530号より>